

ルカによる福音書17章「終わりの日の御力の現れ」

1A からし種のほどの信仰 1-10

1B 兄弟の間のつまずき 1-4

2B 言いつけられた通りにする信仰 5-10

2A 癒された者の感謝 11-19

3A 人の子の現われ 20-37

1B 只中にある神の国 20-25

2B ノアの日とソドムの時代 26-37

本文

ルカによる福音書 17 章を開いてください。私たちは前回、イエス様が財産についての教えをされたことを思い出してください。不正の管理人の譬えを使われて、私たちが永遠の御国のために、この地上にある財産を用いていきなさいという話をされました。「不正の富」という言葉を使われたので、金の好きなパリサイ人たちは、イエス様をあざ笑っていました。そこでイエス様は、金持ちと乞食ラザロの話をされました。金持ちは、ハデスの中で苦しみの所にいます。ラザロは、アブラハムの懐と呼ばれるところで、慰めを受けます。

1A からし種のほどの信仰 1-10

このように、イエス様は各人の終わり、それぞれの終末を語り始めました。自分がこの後、どうなるのか。また、死後にどうなるのか？それは、今、生きている時に主に対して自分がどうなっているかによって決まります。そのことを念頭に入れながら、そしてイエス様は、弟子たちに語り始められます。

1B 兄弟の間のつまずき 1-4

17:1 イエスは弟子たちにこう言われた。「つまずきが起こるのは避けられない。だが、つまずきを起こさせる者は、忌まわしいものです。17:2 この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであったら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。

イエス様は、ここから弟子たちの中でのつまずきについて話されます。言い換えれば、信者たちの間におけるつまずきです。パリサイ人たちは、不信者ですから、金銭を愛するということはあるでしょうが、弟子たちの集まりである教会においても、全く無菌でいることは不可能であります。イエス様は、悔い改めた罪人や取税人と食事をしておられました。その中には、信仰の弱さから再び罪を犯す人が出てくるかもしれません。教会は常に、世との接触の中に生きています。中に罪が入り込むというリスクは起こります。これをイエス様は、「つまずきは避けられない」と言われています。

教会生活をしていると、私たちに衝撃的な知らせが入ってきます。性的な罪は、女性でも男性でも起こります。十代の子なのに、妊娠してしまったということも聞いたことがあります。このような時にどうすればよいのか、私たちは驚き怪しむことなく、主が命じられているとおりに対処する必要があります。

また、この言葉は別の意味で受け取ることもできます。聖書はキリストが、「つまずきの石、妨げの岩」(1ペテロ 2:8)と教えています。キリストは、人々に罪を教え、罪の悔い改めを導き、そして罪の赦しを与えてくださいます。しかし、罪が罪であると認めたくない、悔い改めない者にとっては、激しく怒ったり、憎しんだり、イエスに従っていると言っている人たちが、むしろその告白を捨てるということもあります。これは仕方がないことだという意味も、ここにはあるでしょう。

そしてイエス様は、「それをもたらす者は不幸である。」と言われました。これは、罪を悔い改めて信仰に入ろうとする者たちを妨げるような人たちの事をいいます。ここに「小さな者の一人をつまずかせる」とあります。これは、必ずしも子どものことを意味していません。この世においては小さな評価しか得ない者、あるいは信仰によってへりくだる者、こうした者たちが小さい者です。イエス様のところに、罪人や取税人が集まってきました。そして乞食ラザロもいました。そうした人々が小さい者です。こうした人々が信仰を持ち、それを保つのを妨げるようなら、金持ちがハデスで苦しんだように、厳しい裁きを受けることになる、という警告です。

私は、第一に、この言葉は偽りの教えを教える者たちに当てはまると思います。ペテロ第二などにも、人々に罪を犯させる偽教師の姿が出てきます。なぜ、同性愛者で自分はクリスチャンなのだ、という人が出てくるのでしょうか？神からこのようにされて、私は愛されているのだということ在必死に強調するのでしょうか？もちろん本人の責任もありますが、欧米では、同性愛を正当化する強固な神学体系があります。それは、エホバの証人やモルモン教など、しっかりとした教えの体系です。そしてそれは思想であり哲学でもあり、教会から社会や政治に浸透しているのです。だからこの罪から立ち返ろうとする人がそのような教えに触れて、それで福音の真理によって自由にされることから遠ざけてしまうのです。このように、偽りの教えを説く者たちが厳しい裁きを受けます。

そして第二に、これは私たちキリスト者が、何を焦点にして動かなければいけないのかを教えてください。私たちの交わりは常に、人が悔い改めて信仰を持つという、救いの現場でなければいけません。救いの現場になっている時に、キリストがそこにおられます。使徒パウロは、「あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように、気をつけなさい。(1コリント 8:9)」とあります。自分自身ではなく、他者のことを顧みることによって私たちはキリストを求めます。私たちの自由な交わりが、自分たちのことを求める場となつてはいけません。

17:3 気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。17:4 かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます。』と言って七度

あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

「気をつけなさい。」という戒めです。あなた方自身も、気をつけなさいと実際には書いてあります。私たちが罪に陥らないように、自分自身の内に神からのものではないものがないのか、気をつけなさいといけません。

そして、兄弟が罪を犯した時にどうするのか？という話を書いてあります。ここは大事な教えです。私たちはしばしば、ないがしろにしてしまう教えです。一つは、「戒める」ことです。多くの場合、当人ではなく、他の人々のところに行きます。そして、その罪を犯したとされる人についての話を盛り上げます。それは噂話になる恐れがありますし、また本質的な解決を見ることができません。当人にはっきりと、話すという勇気と責任関係が必要です。

それから赦します。ここで言っている一日七回の赦しは、私たちがいつも赦すのだという姿勢をもって接していくことです。「愛は多くの罪をおおうからです。(1ペテロ 4:8)」とあります。罪を犯した者は戒めるのですが、それを公にしようとする力が、愛によって削がれます。赦し、つまり罪を過ぎ去らせるために、それをもちだそうとする力が失せるのです。私の友人が、ネット上で酷い中傷を繰り返されていることを、この前話してくれました。彼は、その人をぎゃふんと言わせる言葉や御言葉を書き入れようと思ったのですが、やめたそうです。私はそこに、彼のその罪を犯している人に対しての愛を感じました。潰そうと思えば、いくらでもできます。その人が罪を犯しているのですから、公表しても非はありません。けれども、それはしない。このためらいに愛があるのです。

2B 言いつけられた通りにする信仰 5-10

17:5 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。」17:6 しかし主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ。』と言え、言いつけどおりになるのです。

使徒たちは、驚きました。7度も赦すなんて、到底できないと思いました。それで、そのようなことのできる信仰を与えてください、と言っています。これは、もっともな願いのように聞こえます。それを行なうことができないから、行なうことができるようにしてください、とお願いしているわけです。

けれども、イエスにとって、それは的外れな質問です。肉眼で見たら、粉末の一粒のような小さい種です。それだけの信仰があれば十分なのです。使徒たちは、自分たちの内に信心深さが積み上げられなければいけないと思っていました。けれども、信仰さえが神の賜物として与えられるものであることを教えています。使徒ペテロが、38年足なえの男を立たせた時に、「イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの目の前で完全な体にしたのです。(使徒 3:16)」と言いました。イエスの与えられる賜物です。そしてコリント第一 12章 9節に、「信仰の賜物」があります。信仰でさえ、神に与えられるのです。自分の信仰を振り絞るのではなく、神の与えられる信仰です。

したがって、桑の木に「海の中に植わわれ」と命じれば、その通りになります。ですから、私たちは、「できるか、できないか。」という世界に生きているのではなく、「従うか、従わないか。」の世界に生きているのです。

17:7 ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい。』としもべに言うでしょうか。17:8 かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい。』と言わないでしょうか。17:9 しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。17:10 あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」

主人と僕の関係から、信仰の従順についてイエス様は教えておられます。もし、仮にイエスが使徒たちの願いを聞き入れて、使徒たちが一日に7度人を赦せたとしたら、どうなるでしょうか。「私は、こんなに赦せました。何かいただけるでしょうか。」という気持ちが必ず出てきます。なぜなら、自分で行なっているからです。行ないによって生きれば、必ず誇りが出てきて、報酬を求めます。パウロは、「働く(行なう)者のばあいには、その報酬は恵みではなくて、当然支払うべきものとみなされます。(ローマ 4:4)」と言いました。しかし、イエスが命令されるとき、それを実行するのもイエスなのです。イエスが働かれるのですから、その報酬は当然、イエスご自身に与えられるのであり、イエスを信じて生きる者はそのことを意識することができます。自分はただ、信じて、その命令に従っただけです。杖を地に投げなさいと命じられて、それに従ったら、蛇になったのと同じです。ですから、パウロはこう言いました。「それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行ないの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。(ローマ 3:27)」

2A 癒された者の感謝 11-19

17:11 そのころイエスはエルサレムに上られる途中、サマリヤとガリラヤの境を通られた。

ここから、イエス様はエルサレムに入ることをなおさらのこと意識されます。すでにサマリヤの地域に入ったこともありますが、ガリラヤ地方に戻られたようです。そしてまたサマリヤに入ります。ここで本格的な十字架への旅となります。20 節以降の話には、主が十字架につけられることだけでなく、神の国の到来、終末のことについてもイエスは語られます。しかし、その前に御国の力を現す徴を、イエス様は行われます。

17:12 ある村にはいると、十人のらい病人がイエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、17:13 声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください。」と言った。17:14 イエスはこれを見て、言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」彼らは行く途中でいや

された。17:15 そのうちのひとり、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、17:16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人であった。17:17 そこでイエスは言われた。「十人いやされたのではないか。九人はどこにいるのか。17:18 神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」17:19 それからその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」

らい病人が、遠くから叫んでいます。というのは、らい病人は、律法によって人に近づくことが禁じられていたからです。だれかが近づいて来たら、「汚れている。汚れている。」と叫ばなければなりませんでした(レビ 13:45)。そして、イエスが「あわれんでくだ」さるのを願っています。彼らも、イエスの評判を聞いていたのです。そして、イエスが近くによってくれたらと、ひそかに願っていましたが、今、その夢がかなえられたのです。彼らは必死に叫びました。しかも、その中にサマリア人がいました。既に良きサマリア人の話をイエス様が行われましたが、ユダヤ人と異邦人の混血であるため、また混合宗教を持っていたため、ユダヤ人はサマリア人を嫌い、彼らもユダヤ人を嫌いました。それでも、信仰で応答したのはサマリア人だったのです。

彼は、イエスを礼拝し、感謝しました。イエスが神から来られた方であると認めました。ここで、「引き返して」という動詞がとても大切になります。なぜなら、他の9人はそうしなかったからです。彼は直りましたが、英語の欽定訳を見ると、「すべてになった」となっています。つまり、体だけが直ったのではなく、霊も魂も直ったのです。つまり、彼は救いを得たのです。ちょうど生まれつきの盲人が癒された後に、イエスを神の御子と認め、ひれ伏したのと同じです。

このサマリア人と、他の9人との違いは何でしょうか。他の9人にとって、イエスは自分のらい病をいやされる方でありましたが、自分のすべてではありませんでした。自分の病が治れば、イエスは自分にとって関係のない人物なのです。けれども、このサマリア人にとって、イエスがすべてとなりました。イエスが神となったのです。生活の中で起こることは、すべてイエスによるものであり、自分の全存在はイエスにより頼んでいます。私たちはとかく、恵みを喜びますが、恵みを与える方に振り向くことを忘れます。「助けてください。この困難な状況から救い出してください。」と祈ったのに、いったん救い出されたら神のことを忘れてしまいます。サマリア人のように、「引き戻す」ことをしないのです。私たちは、感謝という献身をしていきます。そこにあるのは、僕と同じへりくだりの心です。

3A 人の子の現われ 20-37

1B 只中にある神の国 20-25

「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。21 『そら、ここにある。』とか、『あそこにある。』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがただ中にあるのです。」

イエス様は弟子たちと共に、今、エルサレムに向かっています。エルサレムに行けば、その数日後に十字架につけられることになっていました。そのような最後が近づいている時に、パリサイ人から今のような質問を受けられました、「神の国はいつ来るのか」と。当時のイスラエルの国情は、私たちには想像が難しいと思います。イスラエルの国は、ローマ、その前はギリシヤによって踏みにじられていました。戦争が次々に起こり、ユダヤ人は聖書に書いてあるように、異邦人による支配を終わらせてくださるメシヤ、キリストの働きを待ち望んでいました。メシヤが、ユダヤ人を圧倒しているローマを打破して下さり、神の国を打ち立ててくださると思っていたのです。

そこで、「神の国はいつ来るのか」と尋ねています。しかし、これは正直な疑問ではなく、疑いと非難の言葉であります。「あなたの働きによって、神の国が到来するような兆しが何も見ることができないのだがね。」というものです。

その批判に対してイエス様が答えられました。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある。』とか、『あそこにある。』とか言えるようなものではありません。」イエス様がここで言われていることは、パリサイ人たちが疑いの目で見ていても、それによって来るようなものではないということです。イエスが来られてから、病人を治したり、悪霊を追い出したり、盲人の目を開けたりと、預言者たちが、メシヤが行なうと前もって告げていたことを、イエスさまは行っておられました。ですから、それでイエスがキリストであることを認められるのに、彼らは自分を捨てることをせず、イエスに疑いをかけつづけました。「人の目で認められる」という言葉は、そうした否定的に物事を見ていくことを意味します。

そしてこう言われます。「いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」この訳はとてもいいです。神の国は、ここにある、あそこにあるというものではありません。パリサイ人たちの只中におられる、イエスご自身が神の国であります。イエスをキリストして、また自分の主として受け入れることなくして、神の国がどこにあるのかと探しても意味のないことです。イエスご自身に触れられる時に、私たちは神の国の現実に触れることができるのです。

2B ノアの日とソドムの時代 26-37

そしてイエス様は、パリサイ人ではなく弟子たちに対して、神の国のことを教えられます。

22 イエスは弟子たちに言われた。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時が来ます。23 人々が『こちらだ。』とか、『あちらだ。』とか言っても行ってはなりません。あとを追いかけてはなりません。24 いなずまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように、人の子は、人の子の日には、ちょうどそのようであるからです。25 しかし、人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。

パリサイ人と違って、弟子たちはイエスがキリストであることを受け入れている者たちです。彼ら

によって、神の国はイエスご自身であること、この方がおられるところに神の国があることを知っていました。

しかし今、イエスがおられて、それでこの地上に神の国が立てられるという時ではないのだ、と語っておられます。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時」というのは、イエスが十字架に付けられ、三日目によみがえられ、それから天に昇られるので、しばらくの間、イエスを見ることのないことを言われています。イエスは再び戻って来られる時にならないと、見ることはできません。

そして、「人々が『こちらだ。』とか、『あちらだ。』とか言っても行ってはなりません。」とされています。これは偽メシヤを求めて、こちらだあちらだと言っている姿です。ユダヤ人の中には、偽メシヤが数多く出てきました。135 年には、バル・コクバという人がローマに対するユダヤ人反乱を指揮したのですが、ラビが彼のことをメシヤと担ぎ上げました。彼らはローマに負けて、それ以来、イスラエルの地にユダヤ人をローマ皇帝は追放したのです。そして異邦人の間でも、偽キリストは多くいました。文鮮明は死にましたが、イエスのようにはよみがえりませんでした。

しかし、「いなくまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように」主は戻ってこられます。世界中の人々が見ることができるような形で戻ってこられます。「見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。(黙示 1:7)」

そして、これから弟子たちは、人の子が来られることよりも前に、大事な試練を通らなければなりません。「人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。」これからイエス様は十字架につけられます。「この時代」というのは、「世代」と言い換えたようが分かり易いとおもいます。その世代のユダヤ人によって拒まれ、そしてその世代のユダヤ人が紀元 70 年のローマによるエルサレム包囲によって世界に散らされる事態へとつながります。

イエス様にお会いできるということは私たちの願いですが、その前に私たちが知らなければいけないのは、弟子として生きていくことです。神の国の中に生きるということは、ここにあるように自分を捨てて、日々十字架を負い、それでイエス様に付いていくことであります。

26 人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です。27 ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついたりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。28 また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、29 ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。

ここからが、イエス様が戻って来られる時に私たちが真剣に聞かなければいけない言葉であります。イエス様が来られる時は、ノアの箱舟の時と、ロトの時と同じだということです。それは第一に、「神なしで、自分たちの生活をしている」状態です。食べたり、飲んだり、結婚したり、また商売したり、建物を建てたりしていますが、それらのことをする時に神のことを考えずに行っている状態です。そして第二に、これらのことを行なっているときに、突如として滅びが襲いかかることです。ノアの箱舟も、その戸が閉められてから雨が降り始めました。ソドムとゴモラも、火が突如として降りました。

ヤコブ 4 章 13-15 節に、このような警告が書かれています。「13 聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう。」14 あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。15 むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」主のみこころによって生きていて、それだから飲んだり食べたりできるし、結婚もできるし、御心なら商売もできるのです。ところが、まるで自分たちだけで生きていくかのように、その計画や行動に神が度外視されているのです。

これが私たちの国、また他の豊かな社会に対する警告です。これらのものは、終わりの日には過ぎ去ります。これらのものを神よりも大事にしているから、自分のことばかりを気にして、他者を顧みない社会となっています。こうした社会に対して神は怠りのない裁きを行なうことを誓われました。ヤコブ 5 章を開いてみたいと思います。「1-3 節 1 聞きなさい。金持ちたち。あなたがたの上に迫って来る悲惨を思って泣き叫びなさい。2 あなたがたの富は腐っており、あなたがたの着物は虫に食われており、3 あなたがたの金銀にはさびが来て、そのさびが、あなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くします。あなたがたは、終わりの日に財宝をたくわえました。」弱い人、霊的に貧しい人、こうした人々にキリストの愛をもって接していくのが教会の姿であり、また人間本来の姿であります。ところが自分が幸せになること、自己追及をすること、自分が魅力的になること、自分の将来の計画を立てること、すべて「自分」というナルシズム、自己愛の文化と社会の中に生きていくのです。

30 人の子の現われる日にも、全くそのとおりです。31 その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。32 ロトの妻を思い出さなさい。33 自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。

これらの日常生活が、突如として無きものとなることをイエス様は語られています。「主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に

産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。(1テサロニケ 5:2-3)」ここのイエス様の言葉を聞いていると、まるで津波に似ています。家財を取りに行く時間がないのです。そうすると逃げる時間がなくなります、死んでしまいます。それだけ滅びが早いのです。

けれども、事実、死んでしまった人々がたくさんいます。取りに戻っていった、また家族や知り合いの人を助けに行ったのです。けれども津波の時に、まず自分が高台に上ることを念頭に置いて、家族で全員、高台で会うことができたという話はたくさんあります。自分の持ち物への執着もさることながら、家族もいっしょに救われたいという執着も実は、全てが水で溺れ死ぬという原因ともなったのです。

それが、ソドムの時にはロトの妻がそうでした。ロトが町を出ていったら、その時に天から火を降らすことを天使は告げました。それでロトとロトの妻、さらに未婚の娘二人が逃げました。彼女はソドムにあるものに未練を感じました。それで他の三人よりも、歩く速度が遅かったのでしょう。あるいは、途中で引き返して家にあるものを取りに行っただけかもしれません。けれども、火が天から降った時に死海の水が一気に水蒸気になって彼女に、塩と共に降りかかって、それで彼女は塩の柱となったのです。

いかがでしょうか？ 私たちは、とても自分の生活を大切にしています。真面目に生きています。自分の仕事や勉強をしっかりとこなしています。それらはとても大事なことです。けれども、神なしにそれらのことを行なっているのであれば、それは自分のいのちを愛していることです。しかし、人の命はそれを造られた神のものです。神を自分よりも愛しているから、初めて自分の命を大切にすることができます。どんなものよりも、また家族さえも、神より大切にしてはいけません。このことをイエス様は、「自分のいのちを失う」と言われました。「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。」

34 あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝台で男がふたり寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。35 女がふたりいっしょに臼をひいていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。」36 [本節欠如]37 弟子たちは答えて言った。「主よ。どこですか。」主は言われた。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」

主が戻られるということは、選り分けがなされることであります。今、話しましたように、主にあつて一つのことを行なっている人と、自分のことだけ考えて一つのことを行なっている人では、同じことを行っているけれども、一人は残され、一人は取られるという大きな違いが出てくるのです。取られる人々は、主によってこの滅ぶ世界から救い出されるかたちで取られます。テサロニケ第一 4章に、天からイエスが降りて来て、空中まで引き上げられる恵みが書かれています。「4:16-17 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち

彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

ですから、世にある仕事をしてはいけないということではありません。むしろ、世にあって生きていくのです。けれども、主を思って生きていく人はこれから来る大患難から救われるのです。弟子たちは、どこで、そんな取られて、残されるようなことが起こるのかと尋ねていますが、イエス様は答えられます。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」これは、終わりの日、イエス様が戻って来られる時に、神とキリストに反抗する国々の軍隊がイエス様によって滅ぼされて、その積み上がった死体を猛禽類がついばむという場面です。黙示録 19 章後半に書かれています。つまり、イエス様はこうした物質主義、自己愛の社会の中では、最後はこのように猛禽が来て死体をついばむような状態に成り果てるのだ、ということでもあります。

ですから、ハデスに墮ちるということは個人的終末であり、地上で患難を受けることは世界的終末です。主が十字架に付けられることを、私たちは思い巡らす時期に来ていますが、それはまたこの世の終わり、また自分の終わりも思い巡らすことです。